

第七節 「おもろさうし」と 沖永良部

かつてテレビで放映されたことのある「野生号」は、大陸から耶馬台国への海路、道路、道順をこぎ舟によって追体験し、往古の事跡を確認しようというものであったが、その耶馬台国の史料は「魏志倭人伝」によるものであると聞いている。「魏志倭人伝」は、我が国古代史に関する最古の史料であると言われている。ところが、それに比類すべき我が国の古代史資料は、我が国にはないと聞かされている。また、朝鮮の「成宗大王実録」というのに、琉球の尚真王（一四七七〜一五二七）時代に朝鮮人（済州島人）、金非衣、姜茂、季正などの琉球漂流記が載っているということであるが、それに類する内

容の文献は琉球側にはないとも聞かされている。

このように、ある国の史料がその国にはなく、隣の他国に残されているということはまことに珍らしいことであらうが、それはその当時の国々の文化度の違いを物語るものでもあるかのようなものである。

それはそれとして、かつて沖永良部島で歌われていたであろう「永良部のおもろ」が、その発生地である沖永良部島ではまったく忘れ去られてしまっているのに、「おもろさうし」に収録されていたために残っているということは、沖永良部島にとって、この「沖永良部島に関するおもろ」は「魏志倭人伝」や「成宗大王実録」とまったく同じような役割を果たしていると思われるのではないのである。

島には島人自らの記録が少なく、いわゆる無意識伝承によって受け継がれてきた諸文化も、時の移りとともにしだいに消滅しつつあることを思うとき、「おもろさうし」に収録されている「沖永良部のおもろ」が、たえ部分的であるにしても、古い昔の沖永良部島の一面を知るうえで、まことに貴重な史料であり文化遺産であると言っても言い過ぎではなからう。そういう意味で、「沖

永良部島に関するおもろ」について認識を新たにすべきではあるまいか。

「おもろさうし」は琉球の紀記、あるいは万葉とも言われ、沖縄、奄美の古謡を集めた貴重な文献として知られ、この地方の歴史、言語、宗教、民俗、芸能などあらゆる分野にわたる、魅力的な資料を豊富に集録した秘庫の観があるとさえ言われている。

「おもろ」は「うむる」の表記で、「うむる」はもともと「うむい」と言ったらしく、現在でも地方の神女たちは「うむい」と言っている。「うむい」は「思ひ」の転訛で、胸中の思い「うむい」を美辞麗句を連ねて、韻律的に表現したものである。

「おもひ」「おもい」はいずれも「うむい」の表現であることは言うまでもないが、「うむる」「おもろ」と表記は「うむい」の連体形で、「うむるべと」（思うこと）の省略形であろうと言われている。「おもい」とか「おもり」というのは地方語、平民語で、地方の神女（のろ）のものであり、それに対し「おもろ」というのは、首里語、貴族語で、草紙に記録されたものであるとする説もある。「おもろ」は、「お杜でうたう神聖な歌」を意味する

ものであるとの説もあったが、それに対しては反論があったようである。

一 「おもろ」の採集と「おもろさうし」の編集についてはつまびらかでないが、沖縄・奄美の歴史を、

1 原始時代（漁獵時代、三〜四世紀まで）

2 古代社会（農業部落時代、三、四世紀〜二世紀

末）

3 封建社会前期（按司時代、三山対立時代二〜一

五世紀）

4 封建社会後期（第一尚王国、第二尚王国一五〜一

九世紀）

5 近代社会（一九世紀〜現代）

という時代区分でとらえると、「おもろ」は部落時代の末期から按司時代、三山対立時代を経て第一尚氏による統一王国の成立、次に第二尚氏の中央集権、全沖縄の統一、さらに島津侵入による従属政権への変質まで、およそ六世紀、大体一二世紀から一七世紀半までの五〜六世紀間の歌謡の集積であると言われる。

二 「おもろさうし」の編集年次は、一五三二年〜一六二三年であるうとされている。

三 「おもろ」の種類については、次の八種類があるとされている。

1 地方おもろ。各地に歌われているものを集めたもので、部落時代のもの、按司時代のもので、すなわち初期および中期のもので、いわば農村の「おもろ」である。

2 えとおもろ。これは「えいさー、えいさー」と、にぎやかな囃子を伴う集団舞踊の歌の先行形態とみられる「おもろ」である。

3 えとおもろ。1、2の次に現れるのが、「えとおもろ」である。卷十「ありきえと」、卷十三「船えと」などで「おもろ」総数の四分の一を占める。「えと」は「いーと」（沖永良部では「いっつとつ」）の表記で、本来は労働のときの掛け声を意味する。畑打ち、船こぎ、木挽き、舳すりなどいろいろな労働の掛け声から出発し、リズムに合わせて歌う歌に発達したものが舞踊は伴わない。

4 こねりおもろ。こねりは舞いの手の一つで、振り付けの定まったおもろである。

5 あすびおもろ。あそびは神事、をどりは芸事と言

われるが、神遊び、一般の饗宴きやうえんの歌舞も入っている。

6 名人おもろ。「おもりねあがり」と「あかいんこ」の二人の、おもろ歌唱の名人のおもろ。

7 神女おもろ。首里王宮の高級神女のおもろ。

8 公事おもろ。「みおやだいのおもろ」と言い、王家の公的祭祀に歌うものである。

四 おもろのふし。「おもろ」にはそれぞれふし(曲節)の名がついている。すべて歌われたもので、歌うことによつて伝承されたものであることを物語っている。ふしの名は三百一種あがつているが、別名がついているのもあつて、整理すると約百二十種になると言われている。

五 「おもろ」の用語は、歌言葉で当時の口語をそのまま使用したと思われるのは少ない。

六 「おもろ」の記録は平仮名を主として、きわめてまれに平易な漢字を交え、句点および濁点はまぢまぢで、付してないのも多いと言われる。

七 「おもろ」の歌型については、自由と定型の中間にあると言われ、八音(三、五または四、四)が基調となつていること、対語、対句を用いていること、折り

返しのあることが特徴的であると言われている。

八 対語は千三百余种もあると言われ、その多くは同義語、並行的なもの、正反対のものもある。たとえば、

あめ(雨) Ⅱ くれ(雨くれ)

かえて(帰つて) Ⅱ もどて(戻つて)

おもひ(思い) Ⅱ かなし

げに(実に) Ⅱ だに(……でさえも)

やまと(大和) Ⅱ やしろ(山城)

きや(京) Ⅱ かまくら(鎌倉)

ほこ(矛) Ⅱ ゆみ(弓)

てだ(目) Ⅱ 月

にし(西) Ⅱ ひが(東)

ゆう(夕) Ⅱ あさ(朝)

いし(石) Ⅱ かね(金)

などのことである。

九 対句は対語と同じく、頻繁に使用され、「やかの大はまに、やかの中はまに」、「やかのおい人、やかのもど人」、「しまじりくねぶ、おや国くねぶ」、「おれづもが立てば、わかなたが立てば」などがあり、自然脚韻をふむ結果となり、軽快な行軍歌や進行型の集団舞踊

歌に多く用いられている。

十 折り返しは「おもろ」の一特長であるが、すべての

「おもろ」にあるというわけではなく、巻十の二四や巻十一の八二のように折り返しのないものもある。折り返しは、例えば巻十三の八九「はつにしやがふし」に一 地天とよむ 大ぬし 一 地天とよむ名高し大ぬし ちうらの はなの 美らの花の

さいわたる みもん 咲いわたる 見物 又 天地とよむ 大ぬし 又 天地とよむ 大ぬし

(折りかえし)

と表記してあるが、前(一)と後(又)の二節からなり、又の第二行目は一の一行目の対句(天ち)をすえ、二行目以下は前節の二行目以下の繰り返しである。

だから

一 地天とよむ 大ぬし

ちゆらの、 はなの

さいわたる みもん

又 天ちとよむ 大ぬし

ちゆらの はなの

さいわたる、 みもん

と、読むべきものである。短い感動を表出する叙情的

歌謡に多く見られる。

十一 「おもろ」の総数は千五百五十三首と言われるが、

その中には二重、三重の重複があるので実数は千百四十四首であると言われている。

十二 奄美大島の「おもろ」は、すべて巻十三に入っている。おもろ時代の終期まで、奄美は沖縄の一地方であった。しかし「おもろさうし」編集時代には島津藩の中に入っているのが、主として海上活動の「おもろ」を集めた巻十三に入れたのであろう。喜界、大島、徳之島、沖永良部、与論の「おもろ」約三十種がそれぞれ、文学的に優れたものであると言われている。

沖永良部島関係の「おもろ」は、次のように十五首ある。すなわち、

○ 巻十三の一〇五、はつにしやがふし

(本文) (釈文)

一月しろの、大ぬし 一月代の 大主

きくやなきたけから 月あなぐり嶽から

やまは ひちめかちへ 山端 漬ちめかして

又 あかて てる 月しよ 又 上つて 照る月こそ

あか なさか せひき 吾が汝背が 瀬引き
やひ き多あかるやに 綱引き 上るように

又 ゑらふ てる 月しよ 又 へらぶ 照る月こそ
注釈 月しろの大ぬし月のこと。月の擬人化。きくや

なき(ききやなき、ともある) 月の昇るのを求め
る意。やまは山端。めかちへめかして、ように
するの意。しよ間投助詞「こそ」の約。ゑらふて
る月「混効験集」に「さやか成月也」とある。抜
きんでて照る月という意であろうか。一書に永良部
てる月、とあったのでここに取り入れた。

通釈 月の大神が月を探求するお嶽から出て、山の端を
ぬれるようにして昇つて美しく光るお月様は、我が
父が引き寄せて昇るようだと詠んだものである。

○ 卷十三の一一二、しよりゑとのふし

一 あかかにか ふなやれ 一 あかかにか船遣り
てたかまへ しられて 按司に申し上げて
おゑちへ こうて 追い風を請うて

くもに おくられれ 雲に 送られよ
又 おゑましか ふなやれ 又 上間子が 船遣り

てたかまへ 按司の前

注釈 あかかにか人名。赤銅色の肌をした沖永良部の船
頭とみられている。ふなやれ船遣り、航海。てた
かまへ按司の前。しられて申し上げて、守護さ
れて。おゑちへ追つ手の風。順風。おこられれ
送られよ。送られなさい。おゑまし人名。上間の
お方。し(子)は人名につく接尾敬称辞。

通釈 年老いたあかかにかの航海だ。神様に順風を願ひ求
めて雲に見送られよ。

○ 卷十三の一一三、しよりゑとのふし

一 あかかにか ふなやれ 一 あかかにか船遣れ
ゑらふ むすひよもへ 永良部むすひよもへ
いみやこより いま ここより

めつらゑ やらに 珍しい声を遣ろうか
又 おゑましか ふなやれ 又 上間子か 船遣れ
又 たひに たつ あんは 又 旅に 立つ 我は

くれるてや あれとも 別れかねて寂しいことだが
いみやこより いま ここより

注釈 むすひ人名。よもへ思え、接尾敬称辞。いみ
やこいまこ指小辞。めつらゑ珍ら声、美

しい声、珍しい消息。やらに遣ろう、遣わそう。
くれるて別れかねて寂しいこと。

通釈 年老いたあかかにかの航海だ。沖永良部のむすいを
思い、珍しい消息を送ろう。

○ 卷十三の一一四、しよりゑとのふし

一 ゑらふ たつ あすた 一 永良部発つ 長老達
大くすく げらへて 大くすく 造つて
げらへ やり 造つてやりなさい

おもひくわの おため 思ひ子のおため
又 はなれたつ あすた 又 離島発つ 長老達
大くすく 大くすく

注釈 あすた部落の長老たち。大くすく大きな城。
げらへやり造つて。やり、は補助動詞。おもひく
わ思ひ子。可愛い子。はなれ離れ島のこと。こ
こでは沖永良部島のこと。

通釈 離島の沖永良部へ出発する方々、大きな城を造つ
てやりなさい。可愛いお子のために。

○ 卷十三の一一五、しよりゑとのふし

一 ゑらふ まこはつか 一 永良部 孫八が
たまのきやく たかへて 玉の客 崇えて

ひといちよは ひといちよ(船名)は
すかまうちには はりやせ 朝のうちに 走らせ

又 はなれ まこはつか 又 離れ 孫八が
たまの 玉の

注釈 ゑらふまこはつ後蘭孫八のこと。たまのきやく
神名、奥社の神。たかへて崇えて。ひといちよ

船名。すかま「混効験集」に、四ツ時分とあり。
午前、午後の十時から後二時間のことであるが、こ
こでは早朝のこと。

通釈 離島の永良部孫八が玉の客(女神宮)を崇えて、
船を出すのは早朝のうちにせよ。

○ 卷十三の一一六、しよりゑとのふし

一 ゑらふ 世のぬしの 一 永良部世之主の
ゑらて おちやる のさ 選んでおいた歳
あくか むむよみの 吾子がももよみの

まきんとて みやせ 真絹 取つて見やせ
又 はなれ 世のぬしの 又 離れ 世之主の
ゑらて おちやる 選んでおいた

注釈 のさ歳。むむよみ布の長さを計ることの意。
まきん真絹。ま着。ゑらておちやる選んでお

た。

通釈 離島の沖永良部の世之主が選んでおいた葎で、我が子がむむよみの美しい着物として差し上げます。

○ 卷十三の一二三、うちいてはさきはきしうがふし
一 きこえおしかさ 一 聞こえ押笠かさ
とよむ おしかさ 響む押笠

やうら おちへつかい やうら押しへ 使い
又 ききやの うきしま 又 喜界の浮き島
ききやの もいしま 喜界の燃え島

又 うきしま にかち 又 浮き島にかち
ひるかさり きやち 辺留 笠利に(へ)

又 ひるかさり から 又 辺留 笠利から
中せとうち かち 中瀬戸内に

又 中せとうちから 又 中瀬戸内から
かねのしまかち 金の島(徳之島)に

又 かねのしまから 又 金の島から
せりよさにかち せりよさ(沖永良部)に

又 せりよさにかち 又 せりよさから
かいふたにかち かいふた(与論)に

又 かちふたにかち 又 かせふた から

あすもりにかち

又 あすもりにかち

かなひやふにかち

又 かなひやふにかち

なはとまり かち

注 名高く鳴り響く押笠神女が、静かに船を押しして使者として、喜界島から途中の島々を経て首里城への道程を歌った、いわゆる「島渡りのおもろ」として知られているが、同じものが卷十の四十四にも収められており、それには多くの地名が列挙されているが、煩をいとわず次に掲げることにする。

○ 卷十の四四、打ち出では捌き人が節

一 きこえ おしかさ 一 聞こえ 押笠
とよむ おしかさ 響む 押笠

やうらおちへ つかい やうら押しへ 使い
又 ききやの おきしま 又 喜界の浮き島
ききやの もいしま 喜界の燃え島

又 おきしま にかち 又 浮き島にかち
ひるかさり かち 辺留 笠利に

又 ひるかさり から 又 辺留 笠利から

安須森(辺土にある)に

又 安須森から

金比屋武(今帰仁城)に

又 金比屋武から

那覇泊に

中せとうち かち

中瀬戸内 にかち

又 中せとうち から

又 中瀬戸内から

かねのしま かち

金の島(徳之島)に

又 かねのしま から

又 金の島から

せりよさ にかち

せりよさ(沖永良部)に

又 せりよさ にかち

又 せりよさ から

かいふた にかち

かいふた(与論)に

又 かいふた にかち

又 かいふた から

あすもり にかち

安須森(辺土にある)に

又 あすもり にかち

又 安須森 から

あかまる にかち

赤丸(辺土名にある)に

又 あかまる にかち

又 赤丸 から

さちちやもりかち

崎ぎや杜(古宇利島)に

又 さちちやもりから

又 崎ぎや杜から

かなひやぶ にかち

金比屋武(今帰仁城)に

又 かなひやぶ から

又 金比屋武 から

さきよた にかち

崎枝(読谷山)に

又 さきよた から

又 崎枝から

おやとまり にかち

親泊(那覇港の美称)に

又 おやとまり から

又 親泊から

しよりもり にかち

首里杜に

注釈 にかち || 格助詞で動作、作用の起点を示す格助詞「に」と、格助詞「から」の接続した形。かち || 方向の格助詞「に」、「へ」に当たる。いまの方言では……ンカチとなる。せりよさ || 沖永良部島の古名。かいふた || 与論島の古名。安須森 || 辺土にある別名さはや岳。あかまる || 辺土名にある。さちちやもり || 古宇利島にある杜。かなひやぶ || 今帰仁城の中にある杜。さきよた || 読谷山の別名。残波岬の別名。おやとまり || 泊の美称。那覇港の美称。

通釈 1 名高く鳴り響く押笠(女神官名)が、静かに船を押ししての使者だ。

- 2 喜界島の情熱をかきたてる海に浮かぶ島。
- 3 その浮かぶ島にいてから辺留、笠利へ進み。
- 4 辺留、笠利から中瀬戸内へ進み。
- 5 中瀬戸内から徳之島へ進み。
- 6 徳之島から沖永良部島へ進み。
- 7 沖永良部島から与論島へ進み。
- 8 与論島から安須森(辺土)へ進み。
- 9 安須森にいてから赤丸へ進み。

- 10 赤丸にいてから崎が森(古宇利島)に進み。
- 11 崎が森から金比屋武(今帰仁城の中に)に進み。
- 12 金比屋武から崎枝(読谷山)に進み。
- 13 崎枝から親泊(那覇港)に進み。
- 14 親泊から首里社に進み。

説明

押笠女神官が、喜界島から首里城へ国王を押しにくるまでの道程を列挙したものである。離島の「ありきゑ」として、祭式用に用いる歌には必ず自分の島から首里城へ、船をこいでのおぼる内容のものが歌われる。いわゆる「島渡りのオモロ」と言われるゆえんである。この歌も本来はそうしたものととして作られ、祭場で歌われて、喜界島の神女が国王へあいさつに行く次第を述べていたものと思われる。同文が巻十と巻十三に重ねて収められているように、後には一般の航海のとき出港に当たって歌われ、その言挙げによつて寄港地を無事に通過して、帰ってくるができるようにと願われて、歌われるようになったのであろう。ここにオモロの持つ宗教的呪力性がある。

○ 卷十三の一九〇、しよりゑとのふし

- 与和、泊下りて。
- 卷十三の一九二、はつにしやがふし
- 一 ゑらふ せりよさに 一 永良部 せりよさに
- はこき はりそゑて 端漕き 走り競いて
- あまへ こが 歛え子が
- まふり よわるゑそこ 守り給う ゑそこ

又 はなれ せりよさに 又 離れ せりよさに
 注釈 せりよさ||沖永良部島の古名、または沖永良部内のある地名。はこき||船名、沖永良部島の船。はりそゑて||走り競いて。あまへ||神名、お岳の神。まふりよわる||守りたまう。ゑそこ||大型の船。

- 通釈 離島の沖永良部島のせりよさ(地名)へ早く舟を進ませて、歛^{よる}ぶ神が見守つていらつしやる舟だ。
- 卷十三の一九三 しよりゑとのふし
- 一 かつれんが ふなやれ 一 勝連が 船遣れ
- うけよるは はししやり 請 与路は 橋しやり
- とく ゑらふ 徳 永良部

又 ましふりか ふなやれ 又 ましふり(人名)が船遣り
 注釈 かつれん||勝連の人名。ふな||船。うけよる||請うけよる。はししやり||橋を架かる。とく||徳。ゑらふ||永良部。ましふり||人名。ふなやれ||船遣り。ましふり||人名。船遣り。

- 一 ゑらふ 世のぬしの 一 永良部 世之主の
- おうねはし しまわちへ お船橋 し御座して
- ゑらふしま なちやる 永良部島 成したる
- 又 はなれ 世のぬしの 又 離れ 世之主の
- 注釈 はししよわちへ||橋のように足がかりにして。なちやる||成したる。造つた。

通釈 沖永良部の世之主が、お船でお渡りになられて沖永良部島をつくられた。

- 卷十三の一九一、しよりゑとのふし
- 一 ゑらふ よのぬしの 一 永良部 世之主の
- ゑらておちやるみちやふれ 選んでおいた御駄群
- みちやふれや 御駄群は
- 世之主ぢよ まちよる 世之主ぞ待っている。
- 又 はなれ 世のぬしの 又 はなれ 世之主の
- 又 金くら かけて 又 黄金鞍かけて
- よわ とまり おれて 与和 泊下りて

注釈 みちやふれ||御駄は馬のこと、馬の群れ。ぢよ||こそ、係助詞。金くら||黄金鞍、りっぱな鞍。

通釈 離島の世之主が選んでおいた馬の群れ。その馬の群れは世之主をば待っている。りっぱな鞍をかけて

- 注釈 かつれん||勝連の人。うけよる||請島、与路島。はししやり||橋のように足がかりにして。ましふり||人名。勝連の人。
- 通釈 勝連のましふりの航海だ。請 与路を橋わたしにして、徳之島、沖永良部とを縁あるものとして、差上げます。
- 卷十三の一九五、はつにしやかふし
- 一 さと中の ころかま 一 里中(地名)の子ろか
- ま
- いちのたし まちよく 一の權 真強く
- あまへこか 歛へ子(神名)が
- まふり よわるゑそこ 守つておられるゑそこ
- 又 としらもい ころかま 又 としらもい子ろがま
- 又 たみなたけ めより 又 田皆岳 見より
- 又 にしめたけ めより 又 西目岳 見より
- 又 せりよさの はつきは 又 永良部の はつき(船名)は
- へきおり あけより 走つてきつつある

注釈 さと中||地名。ころ||男。がま||親愛を表す指小辞。いちのたし||一の權、立派な權。としらもい||地名、年よりの意との説もある。たみなたけ||田皆

岳で田皆の拝所。にしめ岳||西目のお岳で西目の拝所。はつき||船名。へきおり||走ってきつつあるの意。あけより||未詳語。

通釈 里の青年の最初のこぎ出しがまことに強く、飲ぶ神が見守っておられる船だ。田皆岳や西目岳の神々が見ている。沖永良部のよく走る船を海に浮かべており。

○ 卷十三の一九六、しよりゑとのふし

一 ゑらふやま またけ 一 永良部 山 真岳

おさんする かみかみ 鎮座する 神々

あんまふて 我 守ふて

此と わたしよわれ この渡(海) 渡し給へ

又 はなれやま またけ 又 離れ 山 真岳

注釈 やま、またけ||沖永良部島にあるお岳。おさんする||鎮座する、おさんは、神が聖域にましますことをいう。と||海、海峡、渡と書いてある。渡中など。

わたしよわれ||渡し給へ、渡してください。「よわれ」は補助動詞。

通釈 離島の沖永良部の美しいお岳から、ながめておられる神々よ、わたしを見守ってこの海を無事に渡し

てください。

○ 卷十三の一九七、しよりゑとのふし

一 ゑらふ おわる みそのろ 一 永良部おわる 三十祝女

みそのろは たかへて 三十祝女は 崇へて

あん まふて 我 守ふて

此と わたしよわれ 此渡 渡し給へ

又 はなれおわる みそのろ 又 離れおわる 三十祝女

注釈 おわる||おわす、いらつしやる。みそのろ||三十祝女、数多くの神女。たかへて||崇めて、敬つて、尊んで。

通釈 離島の沖永良部にいらつしやるたかさんの女神官たち、そのたかさんの神女たちを崇めて、わたしを見守ってこの海を無事に渡してください。

○ 卷十三の二二三、しよりゑとのふし

一 ゑらふ むすひよもへ 一 永良部むすひ 思え

くれる てや なちやる 別れかねて寂しくなった

いみやこより いまこより

めつらこえ やらに 珍らしい 消息をやろう

又 たひ たつ あんや 又 旅 立つ 我は

又 なつたなし やれは 又 夏手無し なれは

ということとかかわりがあることであろう。南島で鉄器を使い、文字を使用する、いわゆる文化段階に達したのが、沖縄では十三〜四世紀、沖永良部では十七世紀以後ではなかるうか、との見方をする向きもある。

はたからむ さわらん 肌からも 触らん

又 つしやの たまやれは 又 数珠の 玉なれば

くひからむ さわらん 首からも 触らん

注釈 むすひよもへ||「むすひ」は人名、「よもへ」||

貴人名につける接尾敬称辞。くれるて||別れかねて寂しいこと。(くれかて)。なちやる||なした。なつたなし||夏手無し、衣の名、芭蕉や麻で作った着物。やれは||であるから。さわらん||触ろう、触れよう。つしやのたま||粒の玉。

通釈 沖永良部のむすひを思い、別れかねて寂しくなつた。いま、ここから美しい声をやろう。旅に立つ自分

分は、夏に着る手無し着物であるので肌からなりと触れよう。数珠の玉をかけているので、首からなりと触れよう。

沖永良部にかかわりのある「おもろ」は、以上のようなものではなかるうかと思われる。

沖永良部島の郷土史を調べていて頼りなさを感ずるところは、何といつても史料がないということである。それは、この島の文化度がまだ文献時代に達していなかった

そういう子どもを併せ考えながら、「おもろさうし」に収録されているこれら「永良部のおもろ」を味読すると、まことに興味深いものがわいてくるのではなかるうか。